

Title	資料二、三片にみる福澤諭吉：『穎才新誌』と吟香日記と『時事新報』ほか
Sub Title	Found FUKUZAWA Yukichi through the materials : Eisai Shinshi, Kishida Ginko's diary, Jiji Shinpō and others
Author	青木, 茂(Aoki, Shigeru)
Publisher	慶應義塾大学アート・センター
Publication year	2009
Jtitle	Booklet Vol.17, (2009. ) ,p.8- 37
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	FUKUZAWA Yukichi 1 : 図版削除
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000017-0008">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000017-0008</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 資料二、三片にみる福澤諭吉

— 『穎才新誌』と吟香日記と『時事新報』ほか

青木 茂

### 一、十四年政変と九鬼隆一

この夏の終わりごろ、旅行の途次に中津駅で降りた。40年ほど前に訪れた時と同様に天気恵まれなかったので、中津の遠浅の海は暗かった。駅の観光案内所には絵葉書などと共に在地の人の労作と思われる福澤諭吉伝の二三が積まれていた。『学問のすゝめ 全』（図1）と題箋を貼った福澤旧邸保存会版の複製版もあった。小幡篤次郎と共著の形でその巻末の端書に「此度余輩の故郷中津に学校を開くに付学問の趣意を記して旧く交りたる同郷の朋友へ示さんがため一冊を綴り……乃ち慶應義塾の活字版を以てこれを摺り同士の覧に供ふるなり 明治四年未十二月」というもので翌5年2月に出版された24ページの小冊子である。これは9年11月の十七編まで続刊されて、のちには「全」とあるのは「初編」とされる。また二編以下は早くて安く上がるので活字版から木版整版となる。

もちろん巻頭は「一 天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずといへり されば……」である。日豊本線の車中でもそうであったが、私はこの言葉を目にし耳にすると、いつも蓮如の『おふみさま』（図2）を思うことになっている（東本願寺ではこの蓮如文集を「御文」とよみ、西本願寺は「御文章」とよんでいる。私は少年時のまま「おふみさま」である）。私は岐阜県濃北の寒村に生まれたが、小学生のころ近所の葬儀の日に坊主が「白骨のおふみさま」を誦するのを一度だけ聞いた（中学からは他郷での下宿生活だったのでその儀礼や法式を知らない）。大きな仏壇の引出しの中には『正信偈』や『仏説阿弥陀経』があって朝夕に家族で読経したのだが、大型本の『おふみさま』は別の引出しにあって在家の門徒などは触れることもしない坊さん専用の、年に一度か二度ばかり開かれる本であった。私は勇を鼓してそれを取り出し最後の方にあった一節「白骨のおふみさま」を読んだ。それからは家に人のいないのを見すまして、坊さんの読む「末代无智ノ在家止住ノ男女タラントモカラハ……」も「一心一向」という振振名に苦勞しながら読み、「白骨のおふみさま」は暗誦できるようになったこと

だった。

さて、福澤はよく知られたことだが「福澤全集緒言」に

余が若年十七八歳の頃、舊藩地<sup>ぶぜんなかつ</sup>豊前中津に居るとき、実兄が朋友と何か文章の事を談ずる其談話中に、和文の假名使ひは眞宗蓮如<sup>れんによしやうにん</sup>上人の御文章<sup>おふみさま</sup>に限る、是れは名文なり云々と頻りに称赞するを、余は傍より之を聞いて始めて蓮如上人の文章家たることを知りたれども、(……) 其後數年を経て江戸に來り洋書翻譯を試るときに至りて前年の事を思出し、右御文章の合本一冊を買求めて之を見れば、如何にも平易なる假名交りの文章にして甚だ讀易し。是れは面白しとして幾度も通覽熟讀して一時は暗記したるものもあり。

と書いている。『学問のすゝめ』の冒頭「天は人の下に人を造らずといへり されば……」を目にし耳にすると、『おふみさま』の「ケフトモシラスアストモシラス ラクレサキタツ人ハ モトノシツクスエノ露ヨリモシケシトイヘリ サレハ<sup>アシタ</sup> 朝ニハ紅顔アリテタニハ<sup>ユウヘ</sup>白骨トナレル身ナリ」が浮かぶのはごく自然のことである。世には福澤の「天」の出典を探す人がいるかのようであるが、蓮如の「トイヘリ」を誰が言ったのか、親鸞が釈迦かを尋ねるようなもので探し得たとしても別に内容は変わらない。実は天は「といへり されば」という構文は、釈迦があるいは親鸞が「トイヘリ サレハ」といった蓮如に倣った福澤得意の文章なのである。「といへり」と定理を述べて「されば……」と続く。否定しようがない。このすぐ後に福澤は「諺に云く 天は富貴を人に与へずして これを其人の働に与るものなりと されば……」とし続けて「前にも云へる通り 人は生れながらにして貴賤貧富の別なし 唯学問を勤て物事をよく知る者は貴人となり富人となり 無学なる者は貧人となり下人となるなり」と書く。この諺も天と同じで「されば」とたまたみ込まれば「ごもっとも」と答えるよりない。この修辭法「といへり されば」は福澤の著作のいたる所にみられ、『おふみさま』の随所に同様の語法がある。福澤の論調によく似た『おふみさま』の文章は例えば「ソレ八万ノ法蔵ヲシルトイフトモ<sup>ゴ</sup>後世ヲシラサル人ヲ愚者トス タトヒ<sup>カチモンフチ</sup>一文不知ノ尼入道ナリトイフトモ後世ヲシルヲ智者トストイヘリ シカレバ……」などである。しかし蓮如の説くのは往生と念仏のすゝめである。

中村正直の『西国立志編』と福澤の『学問のすゝめ』は明治前期青年の立身出世主義に指針をあたえたというのは定説となっている。『学問のすゝめ』初編は明治10年10月までに182,894部を売りつくしたといい、『西国立志編』十一冊は明治3年の刊行で「天は自ら助くる者を助く」という思想の300人以上の人物の成功談集成である。『文部省年報』明治10年度の「小学教科書一覧表」には両書が載せられている。またしても私事に亘るのを許されたいが、私の祖父美代吉は安政4年生れて西南戦争に従

軍したというのが自慢の天動論者で、農作業に出られない雨の日は納戸で福澤の『世界国尽』を小声で音読していた。いま架蔵するその『卷三欧羅巴洲』(図3)を原文のまま写すと(振仮名は適当に残す)「〔欧羅巴〕土地は〔亜西亜〕に連れと その堺目を尋れば 東の方に〔宇良留山〕々より出る〔宇良留河〕末は〔裏海〕に流込み〔甲賀菓山〕の麓より〔黒海〕越えて〔地中海〕」というものである。「一文不知ノトモカラ」ばかりの村での、アジア・太平洋戦争下の文明開化である。祖父はこの本をなかなか見せなかったが、「えうろつば」は「ヨーロッパ」ではないかと私は子供心に思ったが言い出せなかった。祖父の手にした火箸の太さに怖れて私の地動説は敗れ去った経験からである。第二次世界大戦後、アメリカ進駐軍の刀狩りに逢って兄は機械で鍛えた軍刀を差し出し、祖父は小さい脇差を山の中に埋め、在り場所を明さなかったという、九十八歳で死んだ。福澤は慶応になってからだと思われるが、家に伝わる刀剣類を六、七十両で売り払ったという(『福翁自伝』)。刀鍛冶がきたえた日本刀は八十数年間をかけて消えたのである。

『学問のすゝめ』『西国立志編』と並んで内田正雄の『輿地誌略』も小学校の教科書として官からも推薦されたベストセラーで、『輿地誌略』は文部省蔵版であり複製を許した。ために福澤の著作と違って各県でかぶせ彫りによる複製が盛んで、筑摩県版とか飾磨県版があり、千葉県版は限定一万部とされているが現在市場にあるのを見る限りこれに数倍すると思われる。しかし、ここで前田愛「明治立身出世主義の系譜」(『近代読者の成立』1993年、岩波書店)を引用すると、

昂揚する自由民権運動に対抗して、政府は初期の開明的、啓蒙的な教育政策を大きく右旋回させ、儒教的なモラルの復活を図った……。明治十三年十二月には「学校教科書之儀ニ付テハ……国安ヲ妨害シ風俗ヲ紊乱スルガ如キ事項ヲ記載セル書籍」(文部省布達)の採用が禁止され、福澤の著訳書、『西国立志編』『輿地誌略』等が教科書のリストから外された。明治十四年の『文部省年報』「教科書表」には『輿地誌略』が「採用スベカラザル分」に編入され、『西国立志編』は「小学口授ノ用書ニ限り」という制限付きで許可され、『学問のすゝめ』は教科書表から姿を消している。

となっている。これは福澤の『自伝』にある明治十四年政変直後に「從前の教育法を改めていわゆる儒教主義を復活せしめ、文部省も一時妙な風になって来て、その風が全国の隅々までも靡かして……」という、その「風」の初動の姿である。福澤は『自伝』の「一片の論説よく天下の人心を動かす」の見出しの所で「物数寄な政治論を吐いて、図らずも天下の大騒ぎになって、サア留めどころがない、あたかも秋の枯れ野に自分が火を付けて自分で当惑するようなものだ、少し怖くなりました。」という。

国会開設論、自由民権論に火を付けたのは福澤一人ではない、明六社同人などの啓蒙思想であつたらう。明治10年以後、文部省に偉い学者はいたが大臣(卿)になれる人はいなかったようで、福澤の見解は直接にか間接にか文部行政に反映されていたようである。薩摩の圧力に長州は押しされ、佐賀の大隈を政府から追放することになった。という十四年政変の結果、慶應義塾出身者が(九鬼隆一を除いて)官界を追われ、12年ごろからの「教学聖旨」の内示によって復古的に儒教主義的教育を推進しようとする天皇侍補たちの動きに福澤たちは抵抗することができなかつたと思われる。以後福澤の官民調和論や国権拡張論が門外漢の私にとっては、現状追認の魅力ない論調になる。福澤たち啓蒙思想家の役割はほぼ終つたのであり、十四年政変は福澤にとって政治への不用意な接近が思わぬ痛手をうけること、義塾の関係者が青年たちの立身出世の目的であつた官界を追放されるという結果を生んだこと、を痛切に思い知らされたことであらう。「少し怖くなりました」はそのように読める。それだけに火のない所に煙を立てた義塾出身の九鬼隆一に対する怒りは激しいものがあつた。石河幹明の『福澤論吉傳 第三卷』に引く多くの書簡は、時として「勿論彼れも官海中の一人、藩閥はなし学問はなし、唯交際の一芸にて今日まで立身したる事なれば、心配は多き事ならん。時として反覆表裏人間交際の徳誼を破るの極端に達せざれば身を全ふするの難き場合もあらん。此点より觀察を下せば亦憐むべし。」ともあるが「走勢の小輩」「無恥の賤丈夫」への怒りは終生消えなかつた。

実のところ私は腐儒に近い虚学の徒である。慶應義塾や福澤論吉には特別の関心はない。その『自伝』その他も文庫本や全集の端本で読んできたばかりである。ただし松山棟庵訳『地学事始』三冊(慶応3年 慶應義塾出版局)や福澤論吉纂輯『西洋事情外篇』三冊(慶応3年序 明治6年3月再々刻、慶應義塾出版局)(図4)、『同二編』四冊(明治2年序 明治6年3月再刻、同出版局)の表紙が「慶應義塾蔵版」とした用紙で包まれて、両書とも巻一の見返しに「慶應義塾蔵版之印」朱印が押捺されているので、著作権保護のため執拗に戦つた歴史を飾るものとして購入したりしている。また『適々齋塾姓名録』の再現複製版(緒方富雄編、昭和51年5月、大阪大学適塾記念会、和紙和装、帙入)(図5)を入手して、よろこんで大阪の適塾を尋ね、福澤が素裸で降りた階段はこれかと当時を偲んだこともあつた。これには安政2年3月9日に328番目に入門した「中津藩 福澤論吉」の名は貼布された紙片であつて、その下の本紙一六三面(ページ)には「豊前中津 中村術平倅 中村論吉」とある。複製版にも貼つてある。入門者の出身地を読んだり、後年の蘭学者・洋学者の名を見つけたり、その中に佐倉藩の鑄木立本の名を発見したりして、実に面白い読物である。この拙文冒頭に記した『学問のすゝめ 全』については富田正文『福澤論吉襟笈』(昭和17年、三田文学出版部)には「今日伝存する初編の版本中、5年2月出版の活字本なるものを、私は未だ触目したことがない」とし、当時の義

塾には活字版がなかったという。しかし、私が中津で手にした福澤旧邸保存会版は活字本の複製で、このことについてその解説には何も触れられていない。おそらくは昭和17年以後に関係者には周知の事実が発見されたのであろう、私はそれすら知らない。せめてこの稿では責めを果たすため『穎才新誌』を拾い読みし、資料一片を紹介する。

『穎才新誌』は明治10年代の週間少年投書雑誌で11、12年ころは48、49万の発行部数があったという。架蔵するのは14年3月26日の二百号から15年11月11日の二百八十四号までほとんど欠号のない製本済の二冊本である。これを読むと当時の少年が漢字の素養の上に何を読み何を訴えたかったかが解る。二百号第1ページは銚子の秋山銀次郎、十五年七月の「与中村耕学書」で耕学は南総大多喜の友人である。以下、投書の多くは片仮名交り文であるが、現代人の読みやすさを思って平仮名交りとする、十五年七月は生まれてからの年月である、濁点と句読点を加える。彼は言う、「(前略)今や民権の勢威は恰も蕩々たる大河の堤防を壊破して千里を漾すが如く、東西南北行く処として民権の重ずべきを唱へざるはなく、自由の貴ぶべきを説かざるはなし。之を演舌に訴へ、之を文章に発し、遂に我大日本帝国の与論となつて国会を希望するもの多きに至る。」そこで国会開設請願書を持って上京しても政府は人智いまだ進まずといて採用しない。それで「全国の幼年輩と団結して幼年国会党を編成し、以て数名の委員を撰んで政府に建白」すれば、かくの如く「人智己に進めり、宜しく国会を開かん、人民に参政の権を与ふべし」となろう、と説いている。次は東京西久保城山町尚友軒生徒松根常雄十三年五ヶ月は「友人の熊本に帰るを送る」文章で、友人は日本は「大洋の間に孤立し、四海皆海なり。是を以て外邦の凌侮を禦ぎ國権を拡張せんと欲せば、宜しく海軍を振興せざる可からず」と単身上京していたが帰郷しなければならなくなった。熊本人は頑固であるが郷党隣里を薰陶するならば「封建の残夢の未だ醒覚せざる者も亦愛國憂世の心を発す可し……國権以て拡張す可し、皇威以て伸振す可し。何ぞ海軍の振興せざるのみを是れ憂んや。……」という。三人目の芝三田三丁目の豊泉遠十二年二月は「読奥地誌畧」であり、上野温知塾の斎藤保十四年の「宗高射扇」、次の横須賀の野村真二、十三年六月の「梁川紅蘭小伝」、東京第二中学校生徒清安也十二年十一月の「題富士山図」、以上の四名は漢文である。『奥地誌畧』は依然として読まれていて日本・支那はアジアの面目を保っているが、何をもちて異日、インドの患いなきを保てんや、と論は原典を越えて植民地論になる。次の千葉県東金町の今関富二、十年九ヶ月の「苦なければ楽なき説」は『西国立志編』の総論のようで、東京府師範学校の幸田哲也の「拜加藤公廟」(漢文)は前の宗高(那須与一)論と同様の加藤清正論で歴史観として優れたものではないが、このように漢字熟語を操るのはもちろん、文章に綴るのは大方の現代日本人には不可能となっているのではないか。次の六名は小安栄女十年一月を含め漢詩で平仄も合っているようで内容は陳腐で

ある。次に大石主税論、知盛論があり、子守教育論という結論不明の論があり、同誌百九十六号の多田君の耶蘇教論に反対するのは東京共成小学卒業生久我常女十年八月であり『穎才新誌』を人へ送る文を書いたのは宮永長七、八年六月で、全十九人の投書が終る。

これは単に第二百号の目次を羅列しただけではない。14年3月当時、福澤が教えていた学生・生徒たちが何について考え・何を考えなかったのかを示したかったからである。先端部分は福澤を超えて自由民権激派であり、いっぽうでは福澤の国権論を先取りしている、多くは江戸時代の教養を後生大事に守っている。

翻って考えてみるに『穎才新誌』を読むのは私にとっては面白いが、私は明治の学校教育史や青少年論を展開する能力もないし読み違えもするであろう。それに冗長に過ぎるようである。ここでは同誌上での青少年の興味の推移と慶應義塾のことを拾うこととする。議論を呼んだのは同誌二〇六号（14年5月7日）の芝公園松運社笹本竹也十二年七月の「日本語を英語に改むべき論」である。日本語は秩序がなく薩人と奥人とが会話できない、英語は文法が正しく世界の半ばに行われている。一日も早く英語に改めるべきだという陳腐な十二歳の説である。これは猛烈な駁論を生む、早くも二〇九号に海軍属舎天津功太郎十三年三月と山田艸保十四年五月の反論が掲載され、二一〇号には栗本宅次郎十四年六月と城井道綱十三年五月の「駁笹本氏論」が載り、二一一号には年齢不詳の長倉純一郎と、姓名・年齢を記した封筒を記者に失くされた某君の「笹本竹也君の論を駁す」が載るが、当の笹本君は駁論が終わったら駁々論を書くと言ったと投書があったという。駁論は数十篇もあるので次号でお預かりとしたいと記者が書いている。その二一二号は三河豊橋の日下部与一、十三年四月と南埼玉郡の神谷隈之輔十二年三月で、いづれも沈思黙考したあとの高論卓説で字書に頼らねば読めない漢字もある。またこの号には朝鮮から二名の留学生俞吉濬（二十五）、柳定秀（二十六）が6月8日に慶應に入塾したとある。彼等にとって最初の例であろう。彼たちは「彼国の士族にて非役の者なるが本国にても文才の聞えある由」。二一三号には伊藤絃次郎十四年が、笹本君の英語に改むべきの論を擁護して日本語は狭小なる一国のみという。しかし残念なのは笹本君は二三一号（14年10月29日）によればその9日に死去して、その駁々論が聞けなかったことである。とはいえ、福澤のいう「従前の教育法を改めていわゆる儒教主義を復活せしめ、文部省も一時妙な風になつて」の儒教主義、妙な風に対応する日本語論はない。我国固有の伝統美術論によって開明的な洋風画は一時頓挫をきたしていた時代なのである。

『穎才新誌』二一五号（15年7月9日）に長倉純一郎年齢不詳の「青年国会党同盟諸君に告ぐ」が載る。この党は国会開設を政府に建言しようとするものらしいが結党旨意や建言の方策も公開していないようで、長倉君は先の笹本君にも反論を投書した「穎才」らしい。すかさず東京芝区三田慶

應義塾の菊池寅一、十五年十月の「質長倉純一郎君」が二一八号に載る。菊池は「時勢已に斯の如く切迫し 逡巡躊躇すれば「如何なる状態を政治社会に現出するも亦知る可からず」であるから、長倉君は「着実漸進を以て卑怯未練を粉飾する論者」であるという。これに対して長倉は漸次漸進は着実を形容したまでだといひ、青年国会党は近く東京で地方委員を集め一大会議を開くということで決着する（二二二号、14年8月27日）。二二七号には「読福澤氏世界国史」という漢詩を千葉県旭謙二郎十四年九月が詠み、東京共憤義塾の石辺行蔵年齢不詳は「国の盛衰は学の興廃に関する所以」で「惑溺」用語を使う、「惑溺」は福澤用語なのか一般的な慣用語なのか。二二八号（10月8日）には慶應義塾留学生瀧口子潜十三年一月が「勤郷里青年諸君学問書」を発表している、福澤の学問論に、遊学するには蒸氣船の神速ありと付け加えているようである。この号の学事雑報には明治四年以来の有名な中津市学校は中上川彦次郎の帰郷を期に協議して、英学のみを残し他の各科は悉皆廃止し新聞を発行する由とか、ために解雇の教員13人退校生徒150人と不たしかに思える情報が載っている。柏崎に西巻開耶女十五年（二三四号）あれば高知に間崎亀女十三年二月（二三五号）があつて自由民権を説き男女同権を同性に訴えている。

この文章が長くなることを私は怖れている。が、もう少しだけ続けると明治15年3月4日の『穎才新誌』二四八号から二五〇号にかけて福島師範生徒永原鉦作年齢不詳の「男女不同権論」が連載される。早速、二五二号には石原東海男十六年の「非男女不同権論」が、二五三号と次号には関川輝幸十四年十月の「男女不同権論を駁す」、二五五号と次号の曾我部稜威夫十七年六月の「駁男女不同権論」、二五七号の杉田驥一、十二年も「駁男女不同権論」の長文を投書する。二五八号の櫛田葦三年年齢不詳も「非男女不同権論」であるが二五九号と次号の水戸部健吉年齢不詳は「読非男女不同権論」で同権である。二六一から二六五号で初めの火付け役永原鉦作は十七年六月であることが分るが「駁々男女不同権論」で屈しない。その途中二六四号の池上太郎年齢不詳は「男女同権不同権論の仲裁」をする、ここでも仲裁とか折衷論は意味不明である。二六六号の小野三五、十七年五月は「駁々男女不同権論を駁す」は同権論だが続く二六七号の同君のタイトルは「駁々々男女不同権論」で同権論である。

二六八号と次号に続く石原東海男十六年四月は二五二号に続けて「非男女不同権再編緒言」を書き、二七三号から二七九号にかけて七回、横沢重頭十六年四月は「非男女不同権再論 第一章」を連載する。ところが二八一号で潭鶴齋主人十六年七月が「非男女不同権再論 第二章」を書き始めて、実は潭鶴齋は石原東海男であり、第一章を書いた横沢重頭は代筆だといふ。潭鶴齋は二八五号（15年11月18日）まで第二章を五回書き継ぐのであるが、残念ながら架蔵本はここまでで、その完結を見ることはできない。

この間の二七〇、七一、七二号に慶應義塾土屋三八郎十六年の「強兵



論」が連載される。今日の世界は暴戾残忍の淵叢で禽獸社会である、「我國權を張り我國威を墮さざらんと欲せば腕力を措て夫れ何の処にかある」「腕力強盛にして始めて我事理の直きを伸達すべし」「人民愛國の精神は強兵の大本」というものである。「時事新報を読んで感あり」というものもあり「海軍振起論」もある。

教育あるいは読書とは怖ろしいもので、「小学校生徒の他流試合をするのは此の穎才新誌で、全国小学校の児童の晴れの舞台だった」（内田魯庵「明治十年前後の小学校」）という『穎才新誌』の投書を見ると大人の『学問のすゝめ』『西洋事情』、『西国立志編』、『輿地誌略』がそのまま反映、剽窃され、もしくは教師によって指導された跡すら見える。福澤の『増訂華英通語』などを見ると漢数字「九」の筆記体は「9」となっている。現行の活字も時計の文字盤から新聞、図書のページ付けなど総てが「9」である。ところが現在の日本人全部（といてよい）の書く「九」の筆記体はすべて「9」である。日本人は眼で「9」を読み、手で「9」を書く。教育の怖ろしさである。

次には「資料一片」を紹介しなければならぬ。資料の筆者は、のちに『時事新報』のところにも出す小山正太郎である。小山たちの作っていた明治美術会の報告書が出版された時、私はその解説に次のように書いた。

明治美術会第一回展（二十二年十月十九日～十一月三日）の……会場については六ヶ所まで差しつかえあり断われ、苦心奔走のすえ池の端競馬場の馬見処を借りることになった。ところが当時上野公園全域は博物館の管轄下にあったので十月十一日総長に許可願を出し前後七回も往復して依頼したが、総長九鬼隆一は招待日の前日（十月十八日）になっても許可しなかったという（十九日夕刻になってようやく許可された。……稿者にはなんとなく九鬼個人のイジメ行為のように思えてくる）。（中略）

二十三年は春に第三回内国勸業博が開かれ、九鬼隆一審査官長は国粹保存を説き欧州風の混入を阻止しようといひ、はじめは審査官のなかに洋風画家を選ぼうとしなかった。それかあらぬか小山、浅井、松岡、柳、松井ら明治美術会の主要な会員は出品しなかった。（中略）

二十六年に開かれたシカゴ・コロンブス博覧会には会として積極的に出品を推進していたが、『第十七回報告』によると「出品者ノ多数ハ何カ時事ニ感スル所アルヲ以テ俄ニ出品ノ取消ヲ請求セラルル」ことになったのは二十五年七月のことで、当事者が国粹派の出品を奨励し洋風画を継子あつかいにしているというのが理由だった。これまた九鬼一派への批判の表面化したもので、明治美術会に大方は同情的だった新聞に格好の話題を提供し、楽天的で戦闘的な小山の意見が記憶される論議であった。

この明治 25 年に作られた小山正太郎の資料が「洋技排斥例證及美術保護論草案 技術者同盟」という文書と、「逆賊」と題されのち「鬼退治」といわれた一枚の摺物である（図 6）。両資料ともこんにゃく版で、『小山正太郎先生』（昭和 9 年 9 月、不同舎旧友会）に載せられたが、この図書は限定出版で稀覯本のためその形態はほとんど知られるところがなく利用もされなかった。「洋技排斥……」は「九鬼氏洋風技術ヲ排斥セシ例證」と「我徒ノ信ズル所」から成り B5 判 15 ページに及ぶ長文で、「逆賊」は白く薄い洋紙に刷られ皇室の明治美術会参観を楯に九鬼を攻撃して時流に乗じた文書である。

図 1 複製『学問のすゝめ 全』（181 mm×128 mm）  
財団法人福澤旧邸保存会刊 平成 11 年 12 月

図 2 蓮如『おふみさま』 青木文庫（266 mm×217 mm）

図 3-1

図 3-2

図 3 福澤諭吉『世界国尽 卷三四』 青木文庫 (223 mm×151 mm)

図 4-1

図 4-2

図 4 福澤諭吉『西洋事情 外編一』 青木文庫 (223 mm×152 mm)

図 5-1

図 5-2

図 5 複製『適々斎塾姓名録』 緒方富雄編 昭和 51 年 (225 mm×160 mm)

図 6 『逆賊』 明治 25 年 青木文庫 (245 mm×336 mm)

## 二、福澤諭吉と岸田吟香

『福翁百話』の（七）前半には次のようにある。

宇宙の間に我地球の存在するは、大海に浮かべる芥子<sup>けし</sup>の一粒と云ふも、中々おろかなり。吾々の名づけて人間と称する動物は、此芥子粒<sup>けしつぼ</sup>の上に生れ又死するものにして、生れて其生るゝ所以<sup>ゆゑん</sup>を知らず、死して其死する所以を知らず、由て来る所を知らず、去て往く所を知らず、五、六尺の身体、僅に百年の寿命も得難し、塵の如く、埃の如く、溜水に浮沈<sup>ほうふら</sup>する孑孓<sup>ふゆう</sup>の如し。蜉蝣は朝に生れて夕に死すと云ふと雖も、人間の寿命に較べて差したる相違にあらず。蚤と蟻と丈くらべしても、大象の眼より見れば大小なく、一秒時の遅速を争ふも、百年の勘定の上には論ずるに足らず。

左れば宇宙無辺の考を以て、独り自から観ずれば、日月も小なり、地球も微なり。況して人間の如き、無知無力、見る影もなき蛆虫<sup>うじむし</sup>同様の小動物にして、石火電光の瞬間、偶然この世に呼吸眠食し、喜怒哀楽の一夢中、忽ち消えて痕なきのみ。

これを読むと私は『おふみさま』、司馬江漢、岸田吟香を思う。またしても『おふみさま』は「夜半ノケフリトナシハテヌレハ タノ白骨ノミノコレリ アハレトイフモ中々ヲロカナリ サレハ人間ノハカナキ事ハ……」と言ひ、「哀れと言うもなかなか愚かなり」は門徒の口癖になっているようである。福澤は無神論者で功利主義的な宗教観を述べてはいるが、実は仏教的無常観を根にもつ隠れ浄土真宗の徒ではなかったか。

江漢は老荘風のニヒリストになり終わったようであり、吟香は楽天的な刹那主義のようである。さて、吟香の元治2年（4月から慶応元年）1月21日の日記に、

海が深いか、げたのあしあとが深いか、ふじの山か高いか、ありのつき山がたかいか、といふに、いづれもたかくもひくゝもなし。ぶよがながいきをするか、人がいのちがみじかいかな、といふに、いづれもながくもみじかくもなし。あゝなんでもよいよい。

とある。当時彼は江戸と横浜を往返して定職はない。その吟香がヘボンに協力して中国の上海でのちに『和英語林集成』と名付けた字書を編集印刷していた慶応2年12月7日の日記を引用したい。その前に註記しておくとして吟香は元治2年の日記に「あゝなんでもよいよい」としたが、その4月7日に改元があって慶応元年閏5月に福澤は「唐人往来」を脱稿している。これは「江戸 鉄砲洲 某 稿」とした「一本の筆を振り廻はして江戸中の爺婆を開国に口説き落さん」と書かれた遠慮のない開国論であった。ために版行されることはなく、明治30年の「福澤全集緒言」で初め

て公開された。といった例を引くまでもなく、注意深く慎重な福澤は問題になりそうな論は脱稿しても発表はずっと後になることが屢々である。それは別として『西洋事情』初篇三冊が刊行されたのは、引用したい吟香の日記より一日前の慶応2年12月6日である。福澤数え三十三歳、吟香三十四歳。

引用は長文であり貴重な紙面を汚すことを恐れるが、福澤と同時期にほとんど同年齢でこのような啓蒙書を考えていた無名のコスモポリタンがいた事を、私には忘れることが出来ないで敢て引用したい。吟香の日記を活字化したのは円地与四松で『社会及国家』（185号、1931年8月号）に掲載された。原本は失われたので円地の翻刻のままとし、私の註（亀甲括弧）は最小限とした。

七日 朝陰<sup>くも</sup>つてゐてさむし。ひるから雨になる。久しぶりで雨の顔を見る。みかんをたんと、へぼんにもらつた。うれしい事だ。むいてくはうか。あゝもうひがくれるかしらん。からつまらねエといふが、ほんとうにおもひのほか、からといふ処<sup>ところ</sup>はつまらない処だ。この辺ハ周の時代はつまらない処で有つたらうけれども、唐宋時代から以来ハよい処のうちで、書物などにもいろいろ出てゐる処だけれども、ねツからつまらないからつまらねエ。

日本の学者先生たちが、ほんをこしらへるに四角な字でこしらへるが、どういふりやうけんでほねををつてあんなむづかしい事をした物かわからねエ。支那人に見せるにハ漢文でかいた方がよからうけれども、日本の人によませて日本人をりこうにする為につくるにハ、むづかしく四角な文字で、あとへひつくりかへつてよむ漢文を以て書物をつくりてハ、金をかけて版<sup>はん</sup>にしてもむだの事なり。労して功なしといふんだ。

おいらもなにはの〔藤沢〕東咳翁、江戸の〔昌谷〕精溪先生、〔藤森〕弘庵先生の弟子にもなつて、しほのからいたくわんで、儒者くさいめしをもたくさん<sup>クツ</sup>吃たから、漢文のつくりかたも少しハしつてゐるけれども、書物をこしらへるにハ四角な文字ハつかはないつもりだ。

なぜといつてミなせエ、書物をつくる事ハ、ミな世の人によませて、りこうにならせるとか、おもしろがらせるとかの為にする事なり。むづかしい漢文でかいた日にハだれにもハよめねエ。支那人ハ漢学者か<sup>か</sup>でなければよめねエ。さうして見ると学者のこしらへたほんハむだほんなり。むだでもあるまいが、支那人に日本の事をしらせたり、学者によませたりして、学者ハだんだんりこうになり、またおもしろがりなどもするであらうが、世間に学者よりハしろうとの方が<sup>オホ</sup>多いから、しろうとにハさつぱりちんぷんかんぷんなり。だからおいらもしほをこしらへれば、四角なもじでハかゝない。だが年紀〔年期〕をいれておぼえたおかげにハ、今度支那へ来て、ちやんちやんぼうずと筆

談するにハさしつかへがない。

学者先生の著述するほんの中によくある事だが、日本の事を支那の事にあはせて、此事彼国亦有此某書曰云々などといふて、すこしからの事に似てゐると、うれしがつて書いてゐるが、よつほどおかしい事だ。ぜんたい地球上どこへいつたとて、そんなにたいそうちがふはずはない。まして、ちかいからだものを。むかしからおしせうさんにして、なんでもみな習つたんだから、政事でも、文字でも、きものでも、人情でも、似てゐるはずだ。それよかこゝへ来て見るがいゝ。あきんどのみせでも、職人でも、こじきでも、しばゐでも、やくにんのいばるやうすでも、そのまいなひをとる事でも、よびうりあきんどの声でも、しごとしのきやりのふしでも、なんでも日本にかくべつかはつた事ハありハしねエ。学者先生をつれて来て見せたら、これハア一々かくよりハ、日本と支那とみなおなじ事だとかいた方が、はやくてよいといふだらう。

支那の学者々々といふ、てあいの<sup>+</sup>作つた書物ハ、たいていむだのほんなり。實用になる物ハ、十分の一もなささうだ。唐宋あたりのよい先生のこしらへた物といふのが、詩か文章かだから八九分ハ無用のものなり。そのうちに経書の注釈や歴史ハ、實用のものなれども作る人すくなくし。又天文地理あるいハ鳥獸草木の事をかいたほん、またハ医書なども有用の書なれども、支那の学者のこしらへた書物ハ、たいてい十に八九ハじぶんだりやうけんで、いゝくらゐな事をおしはかり〔推量〕にこしらへて、かいたものでやくにたゝず。それだから漢学ハよほどきをつけてせねバ、むだぼねををる事おほし。つまり支那のものはばかがおほいのだ。昔しから神さまのやうにいふ唐の李白や杜甫でも、宋の東坡などでも、一生やくにたつといふほどの實用なほんハこしらへないで死んでしまつた。それといふも詩文に酔て、一生うかうか筆をもてあそんでうれしがつて、人の為になるほどのものをこしらへるに、きがつかなかつた物と見へる。まして近來の支那人の先生てあいが、こしらへた書物に、やくにたつといふものハひとつもありハしない。たゞ文がおもしろいとか、古くさくできたとかいふばかりの事なり。

また支那人ハこのんで、ばけものばなしのほんをつくるなり。ほんとうにあつた事らしく大うそをかきちらして、文をもてあそぶと見へたり。剪燈新話、聊齋志異、耳食録、などまことにめづらしきばけものばかり、よくかんがへてつくり出したものなり。これもふるくからあるくせにて、儒者のたふとぶ<sup>+</sup>左傳、山海經、搜神記などみなおぼけがでるなり。近來は淫書もまたすくなからず。されども小説もなぐさみによむハかまはないが、ほねを折てつくる事ハいらぬ事なり。

康熙字典を見るに、支那の字ハたいそうな数で、幾万といふほど字をこしらへたもんだが、これもばからしい事なり。音の数ハそんなにハ

ないから同音の字がいくらあるかしのれない。それゆえよくまよふ事なり。さて幾万といふほど字が有つても、まだなにやかや、おもふほどにわたらぬからおかしい。またおなじ字をいくとほりにもこしらへたり、おなじ物の名をいくつも字をこしらへたりしてあるが、あれもへんなわけだ。日本ハ五十字に、にごり字を添て七十字ばかりだけれども、たいてい天地の間の事にかけないといふ物はないが、日本の字の法がよほど便利だ。この五十字ハおそくつくりだした物なれども、やはり支那人よりハリこうな事をした物也。支那の字ハ数がおほくて、そのうへ中にハべらぼうにむづかしい字があるが、実に迂遠の事をした物だ。筆談でも、これにハおそれる。支那の大先生でも字典にある字をそらで皆おぼえてゐるわけにハいくまいが、日本のものハ、たいていだれでも、いろは四十八文字ハおぼえてゐるから、何をかくにもさしつかへハない。

おいらがおもふにハどうぞすこし金ができたら、くふ事ときる事にさしつかへのないやうに家法をたてて、それからちつと書物を著述<sup>ツクリ</sup>たいもんだ。むだのほんをこしらへる事ハいらないから先

歴史／字書／天文／地理／医書／訓蒙書／養生書

と、かうつくりたいもんだ。歴史ハ神代の始を、ざつとかいつまんておいて、神武このかたの事をよくたゞして、ことバみじかに、はやわかりに、しろうとによめるやうに、編年してこしらへ、又字書ハ和訓栞<sup>シ</sup>のもすこしべりなやうにこしらへて、古語、中古、新語、漢語、俗語、方言、梵語、仏語、西語などとするしわけて、今日本人の口にいひ、ほんにかくだけのことバをのこらずもとをたゞしてつくりたいもの也。そのうちより別に日用の節用集を作り出して、頭書に有用の事を入れて、此一冊でなんでもすむといふよいほんをもこしらへたいとおもふ。天文の事ハ西洋のを翻訳してよし、また地理の書は此大地球上の六大洲のうちの国々の風俗あるいハ寒暖、草木、鳥獸までもらさず、かつその国の歴史と変革をもよくたゞしてかくべしと心におもへり。ひまあらバ歌のほんをもこしらへたい。詩文ハそのほかの事也。あゝながたらしく、からつまらねエねごとをかいた。雨のおとがそぼそぼとして、世間もしんとして、さむしき夜なり。

慶応2年にこのように柔軟で開明的な発想をし、このような表現をした日本人がいたのである。福澤とほとんど同年齢なので特に私は興味を覚えるのである。この新らしさは同時代の思想家、文章表現者の中では比類する者がいない。もちろんこれは書物にはなっていない、翌慶応3年3月27日の日記に

著述の事ハ、とうからおもひついてをりますが、まだはじめません。ことし日本へかへつたら、なんぞよい書物をあみだしたいとおもひます。



おいらの心におもふにハ、去年十二月に日記にかいたとほり、先ツ日本の歴史、それから万国の地理書の類、それから字書など、ひらかな書にして、日本の町人、百姓でも、職人でも、をりすけ、雲助でも、よめるやうにこしらへるつもり也。しかし先、地球説略のやうな物と、博物新編のやうな物をこしらへる方がよからう。

とはしているが、帰国しても時勢は彼に著述する時間も情況も許さなかった。時代の波に翻弄され、落ち着いた頃は中国地誌の出版を考えていた。彼の日記は長い眠りについて六十五年ほどを経て発表された。さらにその後も七十七年ほどをあまり注目されないうちに今日に至っている。啓蒙思想家福澤を考えよと編集者に言われて私は力が及ばないのを知っているので、黙ってこの日記を差し出すことにした。採る採らないは編者に委ねる。なお、筆まめな吟香の夢の話引用しておく。慶応2年12月21日の日記である。

二十一日 けさは雨ハふらず、しかしよくもないおてんき也。もう十日でお正月だ。昨日までで日本を出てからてうど百日になる。○ゆうべ妙な夢を見た。たかい山の……（中略）山をのぼりながらおもふにハ此山のむかふハ則わがうまれ故郷なれども、<sup>イタサノコト</sup>軍務がいそがしくてたちよる事もできないうちにおもひつゝいくとおもふてめがさめた。おいらハさむらひでハなし、先祖が豊臣家の臣と云つた処がふるい事なり。どふいふわけでこんないめを見たかしらん。十年ばかりまへにふと大名につかまへられて、五六年の間さむらひのなかまにはいつて、いやでこたへられないから、いろいろとしてやうやくの事で、やしきをにげだして、かたなをうつつやつてしまつてから、もうつめくそほども、さむらひになるりやうけんハないが、夢にハたびたび刀をさしてゐる処を見るが、わからないもんだ。実に心にのぞまない事を見るからおかしい。上海へ来てから三度ばかりさむらひでゐる処をいめに見た。いやな事だ。

〔附〕岸田吟香は油彩画家劉生の父親であること、東京銀座の樂善堂で眼薬精錡水を売ったぐらいしか知られていないが、幕末明治初期の新聞・乗合蒸氣船・製氷・聾啞学校などの起業家であり、『東京日日新聞』の名記者、多くの図書を出版し、書家であり、中国では有名な文人、銀座煉瓦街の人気者であった。吟香は美作国久米郡<sup>はが</sup>埴和村に天保4年（1833）に生まれた。埴和村は三河挙母藩の飛地であったためか、前引の夢の中にあるように安政2年（1855）ころ「ふと大名につかまへられて、五六年の間さむらひのなかまにはいつて」いたのは挙母藩中小姓としてであったが万延2年（1861）ころ脱藩したようである。明治38年6月7日歿、七十三歳、クリスチャン。その数奇な行蔵は多方面からの多数の伝記を必要とする。

### 三、『時事新報』と美術

『時事新報』は創刊二十五年の明治40年3月1日の8,398号を記念号として224ページ建てとした。新聞の歴史に詳しくはないが空前絶後のページ数であろう。この縮刷A4判を日本新聞資料協会は昭和36年に刊行した。私はこれによってその日とそれまでの『時事新報』と美術との関係を知りたいと思っている。が、美術関連記事は多くはない。「本日の時事新報」記事に一部三百頁を超える定期刊行物は郵送できないので、A4判ならば896ページにしかない「僅かに二百二十四頁に止まりたる」のは「我社が読者と共に深く遺憾とする所なり」とある。さらに語を継いで

予約に従ひ附録として添加したる洋画四大家の春夏秋冬記念画帖あり、以て清翫幽賞の資に供す可く……時事新報の初号を其儘再現したる四頁……掬汀、秋声両大家の読切短篇小説……記念画帖の筆者以外なる洋画諸大家の手に成れる略画九面も亦画帖の補遺として掲載せられたり

とある。時事新報が日本画家を起用しなかったのはなかなかの見識であるが、残念なのは洋画四大家の名が不明なのと、記念画帖そのものを私たちが囁目していないことである。画帖補遺(図7-1~7-3)としておそらくは金属凸版の版画を提供したのは東城征太郎(東条鉦太郎)、中沢弘光、石川欽一郎、織田東禹、中村不折、河合新造、石川寅治、石井柏亭、小山正太郎で、田口掬汀の「二十五歳」の挿絵は私には未詳の洋風画家であり(図7-4)、徳田秋声「小問題」の挿絵画家は倉田白羊(図7-5)である。ほかには応募漫画家のなかに宮崎ヨヘイがいる(図7-6)。各界の二十五年回顧記事は多いが「五十年來の慶應義塾」(図7-7)があり、美術についてはただ一編小山正太郎の「最近の我美術界」(図7-8)がある。

『時事新報』が創刊された明治15年に開かれた農商務省主催第一回内国絵画共進会は、わが国の固有美術復興論を背景に洋風絵画の出品を拒否する。フェノロサは日本画保護論『美術真説』を講演する。洋風の絵画彫刻を教えた工部美術学校も閉校となる。それから十余年の洋画家たちの苦闘は小山の手にかかると公憤・私憤をまじえて精彩を放ち、美術界の他の分野は見えなくなる。しかし次のように記すのを忘れぬ。

大体は前述の通であるが、我々洋画家が殊に多とする所は時事新報が常に率先して洋画の紹介に力を尽した事で、折々発行される附録又は漫画の如き、画の巧拙は兎もあれ他より一步先んじて居るのは、流石に福澤先生が卓見を保持せる時事新報社の取る道として歓迎するに躊躇しない。夫れに小説の挿絵亦洋画を採用する先鞭となったのは益々多とする所である。

と言う。書き忘れたが、広津柳浪の連載小説『寒熱』の挿絵(図7-9)にはサインはないが洋風である。小山の論にいう「折々発行される附録」は『時事新報』得意の売り物で、大抵は岡村政子の多色石版画であった。岡村政子、旧姓山室、安政5年信州岩村田に生まれ明治7年十七歳で上京、駿河台のニコライ神学校に入り8年1月受洗、師に画才を認められ、9年工部美術学校に入学。ニコライ主教のもとで石版印刷も学んだか。11年学友と共に退学。12、3年ころ同郷の岡村竹四郎と京橋区宗十郎町に石版印刷業信陽堂を創設(15年9月に京橋区加賀町一丁目に創業説(『京橋の印刷史』)あり、これが正しいか)、13年9月岡村に入籍。ためにハリストス正教の聖像画家への修業は同窓の山下りんが代役となり同年12月にペテルブルグへ出発する。信陽堂は多くの作例を残し、岡村政子自身の図画教科書(18年に十二冊、21年に八冊本)や浅井忠の『従征画稿』四冊なども出版している(28年)。ここで余り利用されることのない山室次郎『岡村政子伝』(昭和37年11月、私刊本)から長すぎるきらいはあるが信陽堂と福澤の関係部分を引用する。岡村竹四郎は文久元年の生まれ、若くして上京し福澤家の学僕をしていたという。引用は仮名使いを一部改め、亀甲括弧は私意よっての註記である。

石版画を主とする政子の仕事や石版印刷を本体とする岡村信陽堂の事業も此の〔印刷〕革命の流れに棹すのであるが、何んといっても福沢諭吉の終始変らぬ好意と支援が力であったと思われる。石版画も多色刷り時代となると小印刷工場では高価な輸入もの、石の入手と保持の費用が馬鹿にならない。政子が時事新報の二十八年元旦号の附録「手鞠」を画いた時は恐らくその悩みがあったろう。後年嗣子岡村三郎が母政子から聞いたことを左の様に語っている。『今考えても其頃の事業の、今の言葉での成長度は驚くほどの早さだったと思われる。従って仕事はあり余る程ある、人手も集めるに大した苦労は無し、手はいくら広げても心配は無いが資金はそうはいかぬ、原画が洋画風の細かいものになると一番足りなくなるのは石版の石です。六ヶ敷い絵を刷り上げるには二十版前後というようなものもあり、其の平版の印刷物が校正から本刷りで出来上がるまでは其の石はねかせて置くのですから其の石が(上物は舶来品)欲しい。思いあまって其の資金の入手につき福沢先生に相談にあがった所、即座に私が用立て、やろうとの事、こちらも仕事発展を考え、そう長時日ではなく返済出来るので喜んで拝借、然し恩師の厚情に依る融資金であるため一日も早い返金をと、努力した結果を持って御返済に上がると先生は受け取られず「あなた方の仕事が発展上にもほんとに喜ばしい、その仕事発展のお祝いに差しあげる」と言われてどうしても受け取られぬ。夫婦感激して其の報恩について考えた。丁度その頃先生の還暦であった為其のお祝いとして母が石版(直接クレオン製版用)で先生の肖像画

を描き之を絹地に印刷、上部に余白を置き、これに先生自身の書を入れるようにし、之を軸に表装し、先生から祝をされた人達への引出物になる様にしてお送りしたところ大変よろこばれた』というのである。福沢翁の還暦祝いは明治二十八年六十二才の時に行われている。この恩借は或いはその前年二十七年の浅井忠の画の石版印刷の頃であったかも知れない〔浅井忠の『従征画稿』四冊の印刷は信陽堂にとって重要な仕事であったが明治二十八年のことであった〕。福沢翁は独立自尊の〔一字空白〕本山の様な人で「天は自ら助くる者を助く」の信念の人であったから岡村夫妻も援助を乞うのは心苦しかったろうが、返せるあてがあったから頼んだのであろうし、福沢翁も返金を受け取らなかった程であるから、甲斐のある助けを惜む人ではなかったこと勿論である。それにしても余程信用もあり人がらを愛されていたのであろう。後年岡村夫妻がその家庭で福沢一家のことをいう時には、先生の事は別として、長男一太郎を一さん、次男捨次郎は捨さん、四男大四郎のことは大さん、婿の福沢桃介の事は桃さんなどと呼んでいた程で、余程の親近感を持っていた。竹四郎の机上には常に福翁自伝などがあり、室には福沢翁の「独立自尊」の額がかけられていたものである。ニコライ大主教と共に福沢諭吉こそ岡村夫妻の二大恩人であった。……竹四郎は福沢翁の推せんで、慶応の正規の卒業生というわけではないが、塾員となっている。一生を通じ諭吉翁の言行を範としていた。

平成 11、12 年にポーラ美術振興財団の助成によって、神戸市立博物館・町田市立国際版画美術館・郡山市立美術館の学芸員を中心に、私も参加し日本全国に亘って明治期の石版画調査が行なわれ、14、15 年に『描かれた明治ニッポン——石版画の時代』展が上記三館で開催された。調査作品資料は 2,500 点以上であった。展覧会図録のほかに、この時は小部数の「研究編」も作られた。ここに「研究編」によって『時事新報』のために信陽堂で印刷された、ほとんどが岡村政子によって描画された多色石版画を抜き写すこととする。画家名のないのは岡村政子である。

①時事新報金牌ヲ得タル婦人奏楽之図（単色石版）

時事新報 2768 号附録 23 年 9 月 5 日

②板垣伯之肖像（単色石版）

時事新報 3044 号附録 24 年 6 月 8 日

③恭奉祝<sup>天</sup>婚御式

時事新報 3911 号附録 27 年 3 月 9 日

④浅井忠原画 十二月之内 桜狩（石版筆彩）

時事新報 3934 号附録 27 年 4 月 5 日

⑤松岡寿原画 挿袂〔袂〕

時事新報 3963 号附録 27 年 5 月 9 日

- ⑥二世五姓田芳柳原画 十二ヶ月之内 杜若 (単色石版)  
時事新報 3980 号附録 27 年 6 月 8 日
- ⑦渡辺文三郎原画 十二ヶ月之内 富士 (単色石版)  
時事新報 4019 号附録 27 年 7 月 13 日
- ⑧印藤真楯原画 十二ヶ月之内 夕涼 (単色石版)  
時事新報 4038 号附録 27 年 8 月 3 日
- ⑨亀井至一原画 十二ヶ月之内 美人  
時事新報 4066 号附録 27 年 9 月 5 日
- ⑩小山正太郎図案長尾空太郎原画 十二ヶ月之内 辺城雪 (単色石版)  
時事新報 4106 号附録? 27 年 10 月 21 日
- ⑪高橋勝蔵原画 十二ヶ月之内 雪 (単色石版)  
時事新報 4157 号附録 27 年 12 月 20 日
- ⑫十二ヶ月之内 手鞠  
時事新報 4167 号附録 28 年 1 月 1 日
- ⑬小代為重原画 十二ヶ月之内 摘草  
時事新報 4239 号附録 28 年 3 月 26 日
- ⑭浅井忠原画 帝国軍艦富士及八島  
時事新報 4792 号附録 30 年 1 月 1 日
- ⑮時事新報を読む婦人  
時事新報 5000 号附録 30 年 9 月 1 日
- ⑯愛犬と少女  
時事新報 5105 号附録 31 年 1 月 1 日
- ⑰黒田清輝原画 寅の正月  
時事新報 6513 号附録 35 年 1 月 1 日
- ⑱山本芳翠原画 おまちなね  
時事新報 6878 号附録 36 年 1 月 1 日
- ⑲和田英作原画 こだま  
時事新報 7243 号附録 37 年 1 月 1 日
- ⑳和田三造原画 はれ着  
時事新報 9070 号附録 42 年 1 月 1 日

なお、まだ私などの囑目していない『時事新報』附録には明治 24 年 8 月 2 日の福澤諭吉 (図 8)、9 月 2 日の川路中将有り、いずれも信陽堂石版で描画は岡村政子であろう。

ここに発行順に並べた『時事新報』附録の二十点は私たちが確認できたほんの一部でしかない。げんに二十五年記念号の洋画四大家記念画帖の作家名もその印刷方式も私たちは知らない。ただ、この二十点から言えるのは画家が工部美術学校・明治美術会・太平洋画会系で白馬会・光風画会系が少いことである。また石版画が盛んであったこの時代の主要な題材であった貴顕肖像、芸妓像、東京新名所風景、歴史教訓画が少いのは特記すべ

きことで、時事新報社の開明的な姿勢がはっきりと見てとれる。近ごろは『時事新報』社説の筆者が誰であるかといった論などが一部にはあるようだがつまらんことを問題にしているようで、明治・大正の新聞界での『時事新報』あるいは福澤の位置や評価が問われるべきであろう。社説の傾向は私の知るところではないが附録や挿絵について言えば一貫して新しい光を求める者の先端的ではないが中庸を得た味方であった。

なお、これは福澤歿後も久しく、蛇足であるが「昭和十一年の暮十二月二十四日に、明治以来五十五年の歴史を誇った時事新報が沈没して、作中の人物だけでなく、作者自身までが浪間に漂ふ様な羽目になった」と小説『居候匆匆』を連載中であった内田百閒が小山書店刊（昭和12年6月15日、B6版、223ページ）の同名小説のあとがき「再び作者の言葉」に書いている〔註 慶應義塾大学アート・センターの正確な教示によれば時事新報の終刊「沈没」は12月25日である〕。さらに「沈没と同時に海中に投げ出されたのは、作中の人物と作者ばかりでなく、三十六回まで毎回挿絵を描いてきた谷中安規画伯も遭難者の一人である」と記している。谷中は原則として自画自刻自摺の木版画を毎日創作し、それを金属凸版に起すという新聞挿絵としては前例のない仕事を三十六回続け、彼の代表作ともなったであろう野心的な試みも中絶したわけである。内田百閒は「今から三十何年前、私が田舎の中学生であつた当時、『日本一の時事新報』を購読した事を思ひ出す。その時分には珍らしい十二ページの大新聞で、北沢楽天氏のポンチ絵が載つてゐた。福沢流の社説の特別な文体もかすかな記憶に残つてゐる」と書いている。百閒の小説も谷中のその挿絵も（図9.10）25日の終刊紙上に載って「ぶつりと切れてしまつたのである」。

雑誌『太陽』は博文館創業十二年を記念し、臨時増刊号として現存する『明治十二傑』を発刊した（明治32年6月15日、菊判、570ページ）。選択は読者の投票によるというが（眉唾である）、政治・文学・宗教・教育・軍事・科学・医術・法律・美術・商業・工業・農業の十二部門から各一名を撰んで伝記を載せている。伊藤博文、加藤弘之（文学）、橋本雅邦、伊藤圭介（科学）らとともに教育家として福澤が当選したのは当然であろう。「傑」といい、十二分野の設定といい近代の歴史認識を考えさせられるが、福澤は逸することのできない「傑」の一人ではあつたろう。伝記の筆者奥村信太郎は『時事新報』連載の『自伝』を編述したままで福澤に対する評価や論はない、もっともこれは現存の傑人に談話をとるという建前から、橋本雅邦について書いた田村松魚とて例外ではない。同じように有名人を挙げた表はほかにもある。

『時事新報』二十五周年記念号は第127ページ全面を使って「東京雷名三幅対」（図11）を載せている。当時の有名人を三人ずつ、例えば「皇国無類の三大家」として「学家 福沢諭吉、書家 高林二峯、大家 三井八郎右エ門」と並べたものである。この解説には明治十五六年頃とあるが14年に死去した川上冬崖が入っているのでおそらく14年の印刷物であ

る。この種の有名人をくくって並列するのは相撲に倣って東西に比較する番附表とともに江戸期以来現在に至るまで見戯に類するがその年々の人気を示す示標ともなる一覧表である。

この三幅対は学家福澤諭吉を筆頭に新職業の人たちが見えて興味深いものである。例えば洋医松本順、銅版梅村翠山・松田玄々堂、著述小幡篤次郎、油画五姓田義松・高橋由一・亀井至一、西洋水画五姓田芳柳、眼薬岸田吟香、測量器械中村浅吉、写真薬酢屋清兵衛、洋鋲古江清秀、外科鍛冶清水法龍軒、写真江崎礼二・松林堂、洋食精養軒などである。

『時事新報』に倣って私も架蔵する摺物と番附四点を初公開する。先づ「東京雷名四天王英勇案内」は明治四年夏に文明堂が発行した一枚物で最初に「英仏 箕作貞一郎（麟祥）、英学 福地源一郎、英仏 箕作秋平（秋坪）、英学 福澤諭吉」とある（図12）。まだ劔術や装劔金工、国学、儒者、漢詩人の雷名四天王がいた頃で、福澤が暗殺を怖れて外出をひかえていても時計師、写真家、西洋医とともに東京市民には隠れもない雷名家だったのである。次は「卯の春四面一覧」（明治12年3月1日、清水嘉平出版）（図13）で「勅奏官員表」の東の筆頭は五百円（月給）の参議兼大蔵卿勲一等正四位の大隈重信で、文部省大書記官九鬼隆一は東の三段目にいる、慶應義塾出身者も官員の中には大勢いたのであろう。上段左欄の「当時流行見立」は東が国立銀行、西は新聞雑誌である。中央の行司や取締欄の上段に福澤諭吉の名がある。下の右欄は「大日本書画人名鑑」で東が書家、西が画家という典型的な書画番附であるが、中央の行司の所は女史、次は漢詩人で次は高名な書家、最後に「洋学 福澤諭吉、詩書 長三洲、文人画 安田老山、洋学 菊池大六（大麓）」が並んでいる。福澤は『自伝』に「ロクに手習いをせずに成長したから、今でも書が出来ない」「無芸無能、書画はさておき骨董も美術品も一切無傾着」な無位無官の人であったが、番附を作るとなるとどこかには入れねばならない人であった。四面のなかに福澤は二度登場する、見立や番附には欠かせない人であった。下段左は「東京持丸長者鑑」で、現在でも年度末に税務署が発表する高額納税者一覧表である。当時、画家や小説作者などは絶えていなかった。次は「大日本全国書画大家表」（明治27年1月、精運堂三浦清吉板）（図14）で中央柱の三段目「詩書画 東京」の最後に福澤諭吉とある。最後は『一覧博識 番附百種』（明治28年9月23日、東雲堂出版）（図15）である。単行本の形をとった活字版の番附としては最初の図書であろう。「現今三傑鑑」の博学の欄に福澤は加藤弘之、外山正一と並んでいる。

先に私は架蔵する明治四年版の雷名四天王などを紹介したが、林英夫・芳賀登編『番付集成（下）』（昭和48年4月、柏書房）に明治5年版の「高名三幅対」（図16）があるので併掲したい。どのような政体革命変革期であっても庶民の生活にはさしたる変化はない。どこかに新しい萌芽が注意すれば見えるばかりで、それも自然に見えてくるばかりである。明治4年の四天王はそんな世相を反映していた。ここに挙げた五年の三幅対は日本近

代の方向性が見えてきた見立形式の番附である。最初に「経世学 勝安方、商法名家 三井八郎右エ門、英学 福沢諭吉」がある。張出に「仏学 箕作大六、商法 箕作利左エ門、英学 小幡篤二郎」がいる。以下、名は挙げないが道行く人の誰もが世の変わったことを思わせられる新職業の名を記しておく。右から左へ航学（航海術）、西洋名医、英仏学、測量、洋算、舎密学（化学）、西洋商戸、物産学（博物学）、西洋書林、時計、写真、洋画、西洋器、西洋料理、洋菓、西洋写絵などである。もちろん在来の職種として変革期を生き延びてきた人たちであり、新職業の人たちは外来文化草創期を荷った高名人である。念のため航学は肥田浜五郎、舎密学は宇津宮三郎、物産学は伊東圭助でその功績は忘れられることはない。なお『番付集成（下）』の「大日本名家演説人名録」（明治15年）（図17）の民権欄には福澤の名があり、「東京演説社会人名一覧」（明治14年〔?〕）（図18）には嚶鳴社や共存同衆とともに交詢社が大きく取りあげられ（筆頭は福澤）、政治的にも大きな一国一城であったのを思わせられる。就いて見られたい。

図7-1 131頁、画帖補遺（其の一）

左上から時計回りに中沢弘光、東城征太郎、石川欽一郎、  
織田東禹

図7 『時事新報——二十五周年記念号』 明治40年3月1日  
（複製 日本新聞資料協会刊 昭和36年8月）



図 7-2 139 頁、画帖補遺（其の二）  
左上から時計回りに河合新造、中村不折、石川寅治、石井柏亭

図 7-3 195 頁、画帖補遺（其の三） 小山正太郎画

図 7-4 163 頁、挿絵画家末詳

図 7-5 175 頁、徳田秋声「小問題」 倉田白羊画

図 7-6 67 頁、応募漫画 宮崎ヨヘイ

図 7-8 108 頁、  
「最近の我美術界」

図 7-7 26 頁、「五十年来の慶應義塾」

図 7-9 7 頁、広津柳浪「寒熱」 挿絵画家未詳

図8 『時事新報』 明治24年8月2日附録  
岡村政子画伝《福澤諭吉》(複製 流溪書舎刊 昭和61年)

図9 『時事新報』 昭和11年12月24日  
内田百閒「居候匆匆」連載第35回 谷中安規画

図10 『時事新報』 昭和11年12月25日  
内田百閒「居候匆匆」連載第36回 谷中安規画 【前篇終り】と表記あり

図 11-2 [部分]

図 11-1

図 11 「東京雷名三幅対」 明治 14 年 [?]  
〔『時事新報——二十五周年記念号』 明治 40 年 3 月 1 日、127 頁  
〔複製 日本新聞資料協会刊 昭和 36 年 8 月〕〕  
右上枠「学家」として「福澤諭吉」の表記あり

図 12-2 [部分]

図 12-1

図 12 「東京雷名四天王英勇案内」 文明堂刊 明治 4 年  
青木文庫 (500 mm×377 mm)  
右上枠「英学」として「福澤諭吉」の表記あり

図 13-1

図 13-2  
[部分]

図 13-3  
[部分]

図 13 「卯の春四面一覧」 清水嘉平出版 明治 12 年 青木文庫 (492 mm×355 mm)  
「大日本書画人名鑑」 中央下段右に「福澤諭吉」の表記あり「当時流行見立」 中央上段  
左から 3 番目「福澤諭吉」、3 段左「岸田吟香」の表記あり

図 14-2 [部分]

図 14-1

図 14 「大日本全国書画大家表」精運堂三浦清吉板 明治 27 年 1 月  
青木文庫 (380 mm×515 mm)  
「詩書画」左に「福澤諭吉」の表記あり

図 15-2 本文より  
「現今三傑鑑」[部分]

図 15-1

図 15 「一覽博識 番附百種」 東雲堂出版 明治 28 年 9 月  
青木文庫 (265mm×181mm)  
「現今三傑鑑」、「博学」部門に「福澤諭吉」の表記あり

図 16-2 [部分]

図 16-1

図 16 「高名三幅対」 明治 5 年  
(林英夫・芳賀登編『番付集成(下)』 柏書房刊 昭和 48 年 4 月)  
番付内右上枠、「英学」として「福澤諭吉」の表記あり

図 17-1

図 17-2 [部分]

図 17 「大日本名家演説人名録」 明治 15 年  
(林英夫・芳賀登編『番付集成(下)』 柏書房刊 昭和 48 年 4 月)  
「民権」部門、下から 2 段目中央に「福澤諭吉」の表記あり

図 18-1

図 18-2 [部分]

図 18 「東京演説社会人名一覧」 明治 14 年 [?]  
(林英夫・芳賀登編『番付集成(下)』 柏書房刊 昭和 48 年 4 月)  
「交詢社」部門、最上段右に「福澤諭吉」の表記あり

(あおき しげる・文星芸術大学教授／日本近代美術)